

研修所トピックス<2>

# 心を揺する鬼太鼓



研修所の修了生に会いたければ岩首の祭りに行けばよい！  
 今年は宵宮の為に、盛岡市の黒川さんさ踊り保存会の方々も  
 来島され、いつもの年より懐かしい顔がたくさん集まりました。  
 研修生がふるさと、と感じる柿野浦や岩首の鬼太鼓。今  
 回はお付き合いの古い岩首の皆さんをご紹介します。



岩首鬼太鼓の方々から研修生が鬼太鼓を  
 教わるようになったのは、一九九五年から  
 である。それまでは、前身の鬼太鼓座当時  
 にご縁あって数人の方に教えに来ていただ  
 いたことがあったり、何といても岩首出  
 身のスタッフ、津久美のご実家に呼ばれて  
 皆でご馳走になり、観客としての祭りの楽  
 しさを毎年味わわせてもらっていた。研修  
 所が岩首地区に移ったのを機に、生活の中  
 に息づいている芸能、その地域で大切に伝  
 えられているものを全身で体感したくて、  
 それ以来、毎年の祭りの稽古に参加させて  
 いただいている。

師匠たちは、地元の若者に対するのと何  
 ら変わらず、熱心に鬼を通していろいろな  
 ことを伝えてくれ、踊りを教わるだけだと思  
 っていた私達の心を大きく揺さぶってく  
 れるのだった。今年も祭りの日には、十三  
 晩、親身に教えてくださった気持ちに答え  
 るだけの思いで、ただ必死に鬼を打つ一年  
 生の顔があった。しかし、皆さんの親心で  
 何度も打たせてもらっているうちに、緊張  
 していた気持ちと身体はほどけ始め、いつ  
 のまにか、ここにいないのにいないような  
 全身がしびれるような、喜びに包まれてい  
 る。

あつたかいわくび

文：一九九六年度研修生 座間佳子

「頑張れーおめえが倒れたら祭りには続けられんようなるんだからな」

祭りの日、面をつけた鬼打ちの息が上がり、面の下からこもった荒い息の音がきこえる。肩に担いだ鬼の腕が前にも増してずっしり重く感じる。踊り続け、足がけいれんさえている。そんな若い鬼打ちを岩首の人たちは熱く励まして励まして励まして。鬼打ちは主役なのだ。

子供たちは踊り終えた鬼の腕をとり、うちわで扇ぎ、とにかく鬼のそばに居たがった。小さい頃から鬼打ちに憧れている。今年の祭りで面をつけた若者も小さい頃からそついった子供だったそう。昔の写真を見せてもらうと、見覚えのある五、六歳の男の子が鬼にびったり寄り添ってうれしそうにしている。

子供たちは踊れる年齢になるとまずは老僧を踊り、自分をアピールすることから始まる。それが年長者の目に留まれば鬼になれるという訳だ。そつやって鬼になれた者は「他の者に鬼を打たせたくない。それじゃあ納得できない」という強い強い思いがある。踊って踊って踊って踊り尽くして見守ってくれていた者たちにかかえられて踊り終える鬼打ちは名譽ある英雄なのだ。

やはり岩首にも島を離れていく若者がいる。だが祭りが近くなると、耳元でドンドンチンドン、ドンドンチンドン…と太鼓が鳴る。どんなに離れたところに住んでいようとも太鼓は鳴る。そして祭りの日、みんな岩首へ帰って来る。都会へ行った者が少々かつこつけて古里に戻ってくぬ。そつ



やって都会へ出て行った者でもまた、若衆として祭りに参加できる。やりたい者が参加する。そしてよそ者の私たちも…。それが岩首の祭りの魅力だ。そんなあつたかい祭りが、あつたかい岩首の人たちを作りあげているのかもしれない。

神社でのお籠もり。お酒に酔いつぶれ、獅子の布やハッピを布団がわりにみんなバタバタと寝てしまふ。それを見て年長者は「これでいいんだ」と言ふ。「寝てしまつていても、みんなが居れば淋しくないからね」と微笑む。「祭りは楽しくないからいいよ」とお籠もりの一時間おきに打つ太鼓を打ちに行つた。本堂につれしろうに三時の太鼓を打ちに行つた。

岩首の祭りが好きなのだ。

(一九九六年度研修生調査ノート)

「岩首鬼太鼓の世界」より